

氏 名	小 掠 裕 樹
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 245 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	木地製作用手引ろくろの構造に関する民具学的研究 一木地屋の移住と技術の系統一
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 教授 安 室 知 副査 神奈川大学 教授 佐 野 賢 治 副査 神奈川大学 准教授 関 口 博 巨 副査 立命館大学 准教授 木 村 裕 樹

## 【論文内容の要旨】

本論文は、かつて漂泊生業者として位置づけられた木地屋の移住の歴史と技術の系統について、従来歴史学や民俗学においてなされてきた氏子狩帳の分析とは異なる民具学的な視点から迫るものである。木地屋を象徴する道具といってよい手引ろくろを対象とし、日本国内に残る資料の分解観察と実測図作成を基本とした詳細な民具調査からろくろ構造の地域差を見だし、そこから技術の系統を浮かび上がらせようとする。さらに、そうした技術の系統と木地屋の移住の歴史とを重ね合わせることによって、従来の研究手法では十分には描くことのできなかった技術伝播の実態を解明することが本論文の最終的な目的となっている。なお、章立ては以下の通りである。

序章 目的・方法および構成

第 1 部 木地屋の歴史

第 2 部 手引きろくろの構造比較の方法

第 3 部 国内各地のろくろとその歴史的背景

第 4 部 結論

おわりに

上記の研究目的に即して、まず序章では先行研究の検討をおこなう。従来の木地屋研究として柳田國男を代表とする民俗学的なアプローチと橋本鉄男等による文献史学的アプローチを挙げ、その到達点と問題点を指摘する。その上で、両手法を補完するものとして、徹底してモノにこだわった民具学的アプローチの必要性を指摘し、木地屋を木地屋たらしめる道具といってよい手引ろくろに着目する。民具学的アプローチにおいては木地製作工程に関する研究は多いが、その道具である手引ろくろに焦点を当てた研究はこれまでほとんど見られないため、実測図を多用する工学系の分野でなされた民具研究の研究手法を援用する必要があることを確認している。

次いで、第 I 部では糸魚川市大所の木地屋を例にとり、現地に残された文献資料と口伝資料をもとに江戸末期（19 世紀後半）に定住して集落を形成した木地屋の生活を復元する。また、従来の木地屋研究とりわけ移住史研究に欠く事のできない文献史料である氏子狩帳とその背景にある氏子狩制度について概略をまとめ、その有効性ととともに木地屋技術の系統と移住史を考察する上での限界について指摘する。

第Ⅱ部では、木工具としてのろくろの歴史を概括し、古代・中世にろくろで加工されたとされる器具および中世・近世に描かれた職人尽絵のような絵画資料を題材として、木工具としてのろくろの構造と特性を検討する。さらに、各地の手引ろくろを比較検討するため、ろくろを軸部・爪部・支柱部・台部・引綱部に分け、さらにそのおのおのについて例えば軸部であるなら軸受・軸尻・軸形の3つに分解することで、13に及ぶ比較項目を設定している。その上で、北は東北地方、南は沖縄まで日本全国に残る手引ろくろを訪ね歩き、詳細な実測図を作成するとともに、先の項目に基づく対照表を制作している。

第Ⅲ部は、本論の中核となる部分で、先の対照表をもとに、①東北地方、②北陸地方、③関東・中部・近畿地方、④中国地方、⑤九州・四国・沖縄地方という5地域に日本列島を大別して、それぞれの地域におけるろくろの構造比較をおこなう。また、数は少ないが文献資料や口伝資料をもとに各地域における歴史的背景についても考察を加えている。これによってろくろ構造に顕れる地域的特色から、手引ろくろの構造的・形態的な多様性とその近縁関係を浮き彫りにする。

そして、第Ⅳ部では、上記の論を総括する形で、本論文のまとめをおこなう。1点目として、木地製作の技法とろくろの構造との関係について、ろくろに残る作業痕を手がかりに考察をおこなっている。2点目は、ろくろにおける支柱の形状や爪数、台の形など、その構造上とくに重要な要素9項目について分布図を作成することで、ろくろの形態的特徴について日本全体における分布上の傾向性を読み取ろうとしている。3点目は、ろくろの構造に認められる地域差をもとに、木地屋技術の系譜関係を読み取り、技術の伝播と木地屋の移動について論じた。

## 【論文審査の結果の要旨】

これまで木地屋に関する歴史学・民俗学分野の研究は、氏子狩帳や裁許状といったごく限られた文書資料ないしは口頭伝承をもとにしたものであった。そのため、木地屋の移住と技術の系統を論じるには制限が大きく、結果的にそうした研究は実証性の乏しい仮説の提示に留まるものであった。そうしたとき、従来の研究法とはまったく異なる民具学というモノにこだわったアプローチにより、従来仮説として提示されてきたことを批判的に検証し、かつ木地屋の移住と技術の系統に関して以下に示すような新たな発見をもたらしたことの意義は大きい。

方法論として用いた民具学的アプローチも、従来おこなわれた単なる形態・機能の比較検討に留まらず、詳細な実測図を作成しつつ、手引ろくろを分解し13のパーツに分けることでより精緻な比較検討をおこなった点はこれまでの民具学の常識を打ち破るものであったと評価される。

その結果、たとえば、ろくろの支柱に刻まれた作業痕をもとに、さまざまなろくろ技法のあり方を解明し、さらにそれがろくろ構造に及ぼした影響について検証する。その結果、ろくろの構造と切削技法とは密接な関係があり、中でも東北地方に独特なV字型ろくろが東北地方に特徴的な技法によってもたらされた構造面の変化であることを示したことは特筆すべきである。

また、対照表に整理された詳細な項目データに基づいてろくろの特徴を日本地図に落としこみ、その分布状況から地域間の伝播関係や技術の系統（木地屋の系譜）を読み解こうとする。そうした様々な特徴を項目ごとに複数の地図に分けてプロットし視覚化することで、日本列島におけるろくろの特徴的な分布状況を読み取ることが可能となったといえよう。そこで判明したことは、まずろくろ構造の二分法である「タテ受型」と「ヨコ受型」がほぼ東西に住み分ける形で分布すること、また東北地方北部のような氏子狩の勢力がおよばなかった地域においてはろくろの構造が自由に変形改良されたのに対して、氏子狩の勢力が強かった中部地方以西では構造が均質化して伝わって

いたと想定されることがわかった。いずれも従来の研究を凌駕する蓋然性の高い論といえよう。

また、そうしたろくろの形態的特徴を示す分布を木地屋の移住に重ね合わすとき、例えば西日本に特徴的な系統に属する木地屋がその圏外である東日本に移住した場合、その技術を保持したまま移住していた可能性の高いこと、および移住先の系統に溶け込むことなく技術的には孤立して存在していたことが指摘される。ともにこれまでの木地屋研究ではなしえなかった考察であり、現時点においてはもっとも蓋然性の高い仮説であるといつてよい。

さらには、ろくろ構造の比較分析から木地屋の歴史を読み解く試みとして、石川県の旧真砂村と旧柳田村の双方で確認された独特の構造をもつろくろについて検討している。両地域は文献上も口伝においても歴史的系譜関係はないとされてきたが、この二つのろくろが示す特徴は全国的にも類例がなく、この二地域の資料だけが持つ特徴が複数確認されることから、二つの木地屋の間にはなんらかの歴史的な関係が存在したと想定された。

以上、本論文は、手引ろくろに着目して、独自の詳細な民具学的分析により、木地屋の移住と技術の系統について、従来の古文書や伝承をもとにした研究を批判検証し、かつ新たな仮説を提示したことの学史的意義は大きなものがある。

ただし、手引きろくろの分布を日本列島上に描くとき、いまだ中国・四国地方にはごく少数の分布しかなく、またろくろの根源地とされる滋賀県にも資料が見いだされていないことから、今後そうした地域で新たな資料の発見が為されたとき本論は修正されなくてはならない部分が出てくると考えられよう。

以上、本論文は神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科における博士論文として大きな成果をあげ、高度な水準を達成したものと評価できる。審査委員一同は、本論文が博士（歴史民俗資料学）に相応しい水準にあると評価した。